

◆巻頭言◆

三湖（八郎湖、田沢湖、十和田湖）にまつわる徒然

秋田県健康環境センター所長 杉山 徹



毎年、8月の第四土曜日に秋田県大仙市大曲で開催される「全国花火競技大会」は、全国の花火師が、自らの名誉にかけ技を競い合う玄人好みの大会として、年々、著名になりつつあります。この大会のフィナーレで会場に流れるのが「秋田県民歌」です。「秀麗無比なる鳥海山よ」の冒頭の句から始まる文語調のこの歌では「神秘の十和田は田沢と共に、世界に名を得し、誇りの湖水」と讃えられております。

十和田湖（青森県部分も含む）と田沢湖、そして八郎湖は本県を代表する三大湖沼であり、県民にとっては、ふるさとの原風景を構成する心の拠り所にもなっており、それは「三湖伝説」として民間伝承されております。

「三湖伝説」については、所々でバージョンに違いがありますが、大筋は次のようなものです。

昔々、本県の鹿角地方に「八郎太郎」という若者が住んでいたが、ある日、掟を破ったために龍に化身し、その住処として十和田湖を創り、主となった。ところがある日、南祖坊という修行僧との戦いに破れ、米代川を下り、日本海に面した場所に安住の地、八郎潟（かつては琵琶湖に次ぐ日本第二位の面積の湖であったが、戦後の干拓事業により、大部分は農地に変貌。残存部分が現在の「八郎湖」）を創った。

同じ頃、仙北郡神成村（現在の仙北市）に辰子（たつこ）という美しい娘が住んでいたが、辰子も掟を破ったために龍に化身し、田沢湖を創り、自らの住処とした。

辰子に恋心抱いた八郎太郎は毎年冬に田沢湖に通うようになり、冬の間、主がいなくなった八郎潟（当時）は湖面が凍結し、二人（二匹？）が暮らす田沢湖は凍結しなくなった。ちなみに、南祖坊が横恋慕して戦い挑んできたが、今度は八郎太郎が勝った。

以上が、「三湖伝説」のあらすじですが、伝説の背景には、火山噴火や洪水などの災害への虞と、その災害を引き起こす自然への恐れ、掟を破ることへの戒めがあると言われております。

そして現在、先人達の三湖に対する畏敬の念を受け継ぐ者と自称する私ども秋田県健康環境センターでは、公共用水域水質調査のほか、個別調査等を別途実施し、

三湖の環境保全対策の一翼を担っています。

例を挙げれば、十和田湖においては、本県と青森県が共同で定めた「十和田湖水質・生態系改善行動指針」に則り、調査を実施しています。

田沢湖においては、酸性湖沼化（最近ではpH5.0～5.3で推移）の原因でもある玉川上流域も含めた調査を実施しておりますが、H29年7、8月の豪雨の後、色相が群青から緑に変化し、地元紙にも取り上げられる事態になりました。現在は、色相は戻りつつありますが、今般の事態をデータ収集、解析の絶好の機会と前向きに捉えて機構の解明に取り組んでおります。

八郎湖につきましては、干拓完了後に富栄養化が進行し、水質環境基準（A類型）が確保できない状況が続いています。県ではH19年12月の指定湖沼の指定後、H20年3月に「八郎湖に係る湖沼水質保全計画」を策定し、現在は第二期計画に改訂し、水質保全のための各種対策を実施しており、当センターが採取したデータが、効果検証や今後の対策に活用されております。

余談ですが、八郎湖につきましては、毎月、試料採取を行っていますが、風量次第によっては、舳先からの水しぶきで全身濡れ鼠になってしまいます。私も秋口に乗船しましたが、しぶきの水圧が半端でなくて、合羽を着用していても効果がありませんでした。「八郎太郎さん！辰子さんの処に通わず、年中、見張ってくださいよ！」とぼやいてしまいました。

冗談はさておき、三湖は本県の水質保全の状況を映す鏡であり、象徴でもあります。先人から受け継がれてきた誇るべき環境を、我々が努力し、次の世代に引き継いでいかなければなりません。そう言った意味で、当センターの使命は重いと思います。三湖の主である三龍神（八郎太郎、辰子、南祖坊）への畏敬の念を忘れずに、研鑽を積んでいかなければならないと徒然なるままに考えています。

最後になりましたが、H29～30年度の北海道東北支部の支部長を秋田県が務めることになりました。全国環境研協議会のネットワークの更なる充実に微力ながら努めてまいります。